

眼科ケーススタディ 網膜硝子体

吉村長久・喜多美穂里（編）

本書は京都大学眼科教授・吉村長久氏、前同大学准教授、現兵庫県立尼崎病院眼科部長・喜多美穂里氏編集による網膜硝子体疾患、31症例のケーススタディである。執筆者はすべて、京都大学眼科の教室員および同門会員である。項目は日常よく遭遇する網膜硝子体疾患、眼底・硝子体所見や主訴からなり、典型的な症例を挙げ、主訴、初診時所見、全身および眼科的検査所見、治療と管理という診療経過順に記載されている。合間に囲み記事として、まず症例のポイントの要約や、そこから考えられる鑑別診断、検査結果からの疾患の理解がまとめられている。次いでポイントとして検査結果の読み方、注目すべき点、関連疾患との鑑別の要点などがまとめられ、さらにメモとして確認事項や現在の論点、最新知識が取り上げられている。最後にはこの疾患を勉強するうえでキーとなる文献を、その貢献内容とともに網羅してある。

本書の特徴は、各症例が初診時から結末まで、担当医の思考過程に沿って経時的によく整理されていることである。まさに紙上の症例検討会であり、眼底所見や画像所見をどのように表現したら良いか、どう読んだら良いか、その結果をどう解釈していくのかという判断の模範が示されている。なにより特筆すべきは、最新の光干渉断層計（OCT）や造影などの画像所見と肉眼的眼底所見が美しい写真とともに経時的によく対比されている点であり、読み進めていくうちにまるで学生時代のCPC（clinico-pathological conference）を受けているような錯覚に陥った。もちろんそれはOCTの進化のおかげであるが、CPCでは最終末の病理組織所見が主体であるのに対し、OCTでは疾患の経時的な、ある意味光学的顕微鏡所見にも匹敵する構造的変化を把握でき、組織標本を超える情報力を提供している。これは網膜硝子体という透光組織で初めて可能なものであり、本書はその特色を最大限に利用して疾患病態を解説した新しいタイプの眼科教科書といえる。

加齢黄斑変性やポリープ状脈絡膜血管症、中心性網脈絡膜症などの項目は著者らの教室が最も力を入れている領域であり、言葉の解説から、最新の病態の考え方で簡潔明瞭に解説されている。代表文献の解説も大いに有用である。黄斑浮腫や黄斑前膜に対する治療効果の解説、手術治療効果の現実的評価にも好感が持てる。サルコイドーシスや急性網膜壊死、アミロイドーシスなど、まぎらわしい疾患への考え方、対処の順序に加え硝子体サンプルの採取方法など実践的知識もあって、臨床医のニーズによく答えている。後半には網膜剥離症例の手術選択方法、難治例対策にも触れてあり、手術医にとっても興味深い内容である。最後の付録にある画像の基本ルールも用語を整理するうえで有用である。本書が全体にわたって理解しやすいのは、多くの施設の共著ではなく、同門による執筆のため、考え方や執筆スタイルが統一されていることによると思われる。

本書は日常遭遇するほぼすべての網膜硝子体疾患を網羅しており、その診断と治療選択に至る思考過程の教科書である。若い人には症例の診かた、病巣の表現方法、プレゼンテーションの仕方の手本となるであろうし、専門医にとっても日進月歩の知識を整理するうえで最適の書である。美しい画像写真は特筆ものであり、行間が広く読みやすい。ケーススタディとされているが、網膜硝子体疾患の最新の実践的教科書といえる。このような企画を思い立ち、実現された編者に拍手を送りたい。是非とも皆様にもご一読される事をお勧めしたい。

神戸大学教授・眼科学 根木 昭

●B5 頁 272 2010 年

定価 13,650 円（本体 13,000 円＋税 5%）

[ISBN978-4-260-01074-0] 医学書院刊